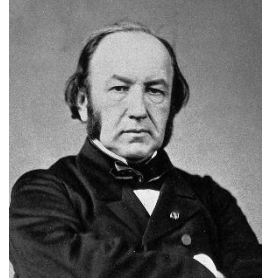




D-グルコース（右旋性ブドウ糖）、グリコーゲン

<https://l-hospitalier.github.io>

2020.1



近代医学の祖、
クロード・ベルナール
動物実験は良いが
人体実験は絶対い
けないという立場。
離婚後夫と娘2
人は動物愛護運動
に奔走した。

感染対策の基礎知識

#222

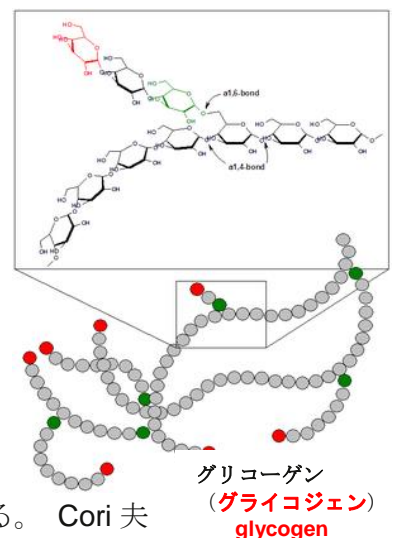
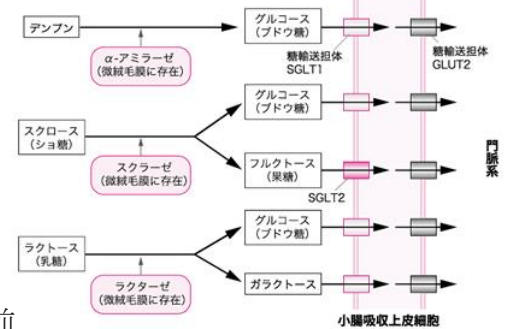
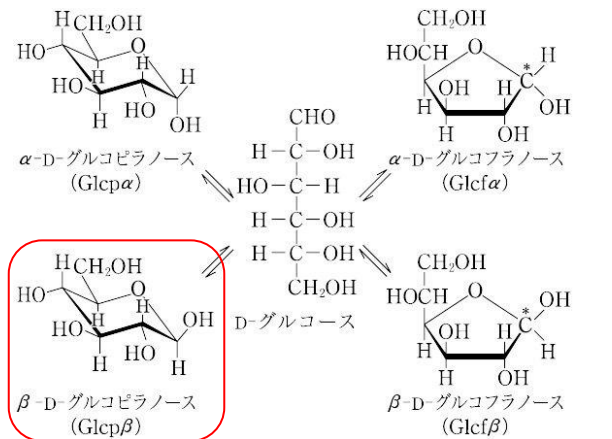
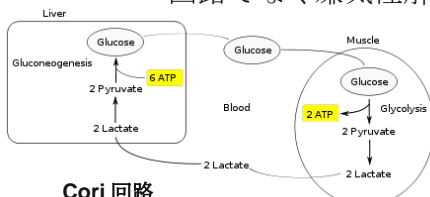
【単糖】は炭水化物(carbohydrate)とも言い、文字通り炭素と水が1対1で共有結合したもの。化学式は(C H₂O)_n。例えばブドウ糖はC₆H₁₂O₆で(C H₂O)₆。nは3,4,5,6,7で5単糖と6単糖が一般的。全ての単糖はOH基の他にアルデヒド基かケトン基のいずれかを持つ。生体では6単糖のグルコース、マンノース、ガラクトースが主で左図のようにマンノースでは2位の、ガラクトースでは4位の炭素につく原子の配置だけがグルコースと異なる異性体だが、相互の変換にはいったん共有結合を切断してつなぎなおす必要があり、それにはエピメラーゼ

(epimerase) 酵素が必要。【光学異性体】グルコースは多細胞生物が外部から取り入れる主要エネルギー源。進化の過程で右旋性(D型)が代謝されるようになり、L型は処理されない(右旋性:dextro-なのでデキストロース Dextrose。左旋性 sinistro-なら Sinistrose?)。生体では左旋性のL型化合物が生理活性を持つ事が多い。通常ブドウ糖の水溶液はほとんど右図左側のグルコピラノース(6員環)で、稀に

図右側のグルコフラノース(5員環)の形をとる。OH基が環と同一平面(エカトリアル)か垂直(アキシヤル)かでαとβの異性体がある。グルコピラノース(図左側の2つ)の椅子型図をみると図左上のα-D-グルコピラノースはOH基が同側で近接するので分子間反発があり、図左下のβ型が安定で63%、図左上のα型は37%(鎖状構造は0.01%)

【糖の吸収と貯蔵】澱粉、蔗糖、乳糖は右図の各酵素で分解され門脈に入る。肝細胞はインスリンと GLUT4(glucose transporter type 4)の働きで糖を細胞内に取り込む。150年前にクロード・ベルナール^{*1}が、生体は肝でブドウ糖をグリコーゲン・シンターゼでグリコシド結合して糖8-12個ごとに分岐するグリコーゲン(英語はグライコジェン)に合成、肝重量の8%(110g)のグリコーゲンを肝内に蓄積、グリコーゲンを分解した糖の放出が血糖調節の主要機構と結論した。グリコーゲンはアドレナリンやグルカゴンによりグリコーゲン・フォスホリラーゼ(欠損はマッカーデル病)でグルコース(モノマー)に分解され、リン酸化されてグルコース6リン酸(G-6-P)として解糖系に入る。骨格筋のグリコーゲンは1~2%だが筋は総量が大いので300g程度を保持。肝ではグルコース6フォスファターゼで脱リン酸されブドウ糖を血流に放出するが筋のグリコーゲンは糖として血流に放出されない。グリコーゲンのヨードに対する呈色反応は澱粉とブドウ糖の中間の赤茶色。【Cori 回路】激しい運動や酸素不足時にはTCA回路でなく嫌気性解糖回路(Embden-Myerhof-Parnas glycolysis)が

ATPを産生。代謝産物の乳酸は筋に蓄積する。骨格筋の乳酸は血流で肝に運ばれATPを消費してピルビン酸を経てブドウ糖に再合成される。Cori 夫妻^{*2}が発見、骨格筋のアシードシスを防ぐ機能がある。乳酸は疲労物質でなく栄養源でpH低下が疲労(感)の原因物質。



^{*1} C.ベルナール「実験医学序説」、R.デカルト「方法序説」、ラ・メトリ「人間機械論」、M.ウエーバー「職業としての学問」は医学科教養部学生の必読本と入学時ガイダンス。クロード・ベルナールは犬に砂糖を静注すると尿に排泄されブドウ糖だと吸収し尿から検出されないのを発見。また腸に糖の存在しない絶食犬の肝臓から糖を検出、グリコーゲンの分解による糖産生を証明した。まだ麻酔のない時代で動物虐待と悪評。^{*2} B.ウッセイと1947年ノーベル賞